

優秀賞 愛知県 浦野 則夫 様（60代 男性）

春の訪れが近づいて来たある日、薄暗い和室の部屋で母が背中を向けて座り込んでいた。

何気なしに声をかけると母は「年金の通知を見ているのだよ」そう言って一通の葉書を見せてくれた。そこには国民年金の支給額明細が印刷されていた。

「年を取ると年金がたのしみだね」母はそういったかと思うと筆筒の引出しにその葉書を大事そうにしまい込んだ。

当時、私は、会社勤務をしていたので母の言葉に「ふうーん」と答えたり、あまり年金には関心を持っていなかった。夫を早くに亡くした母にとっては毎月の生活費になる年金が頼りだった。

母と同居して毎日顔を合わせ、食事なども一緒だが、親子でもやはり金銭のこととなると、一応のけじめをつける母だった。母は孫に小遣いをやり、時にはおもちゃを買い与えていた。今考えてみると少ない年金の中から工面してくれていたかと思うと少し胸が痛む。

やがて母は体調を崩して寝たきりになり体を動かすことが困難になった。

夫婦交代で自宅介護をしていたが、それもかなわなくなり、やむなく施設に預けることにした。施設へは給料から支払いを済ませるつもりだったが、年金からの支払いを母が強く要望したので、甘えることにした。

母に「せっかくの年金を介護に使うよりも、自分が払ってあげたかったのに」と言ったら、「こういうときのための年金なのだよ」と叱られてしまった。

「嗜好品や品物を買うのも年金ならば、病気や治療費に使うのも年金なのだ。とくに老後の安心のために年金が必要なのだ」と、母に言われた。年金の意味をあまり重要と捉えていなかったかもしれない。

まもなくして母が亡くなり、それから会社を定年退職した。そして年金の支給が一部始まった。

65歳になると年金も満額支給されるようになった。会社員のころ受け取っていた給料も、ボーナスもなくなった。

これからは年金に頼って行かなければならなくなった。現役時代の蓄えは多少あったが生活していくための不安が残った。唯一の収入源が年金になると支給日が待ち遠しくなって来た。自身が年金の対象者になろうとは。歳月はあっという

間に過ぎていくものだと思った。

若いころは個人年金の積み立てもしていたが、遠い将来の事と思い、数年積み立てただけで解約をしてしまった事もある。給料から毎月天引きされる厚生年金に「手取り額が少ない」と文句を述べていたが、いざ支給される年齢になると、本当にありがたみがひしひしと、湧いてくる。

その昔、母が楽しみに支給日を待っていたのが、頭に浮かぶ。あの時の母と同じ立場になったのだ。無関心に世間話のように母と年金の会話をしたのが、今思うと生半可な返事をしていたことが悔やまれる。年金の支給は切実な問題なのである。

母が亡くなって母の部屋を整理していたら、引出しに母が今まで受け取っていた年金通知の葉書がすべて日付順にきちんと整理されていた。年金通知はとても重要な葉書であったのだ。

最近、年6回の年金支給日もすっかり、生活サイクルとして定着してきた。以前の母のように、安心した老後生活が送れるように大切な年金を、有意義に使っていかねばならない。何のために年金が大切なのか。年金の支給目的は何なのか。年齢を重ねるとともに少しずつわかるようになった。年金の支給格差や、不公平の問題点など国による年金制度は、まだまだ見直し、検討の必要性があると思う。これからの若い人は年金の支給がどのようになるのか不安なことと思う。年金は老後のおこづかいではなく生活そのものなのだ。

